

# 弔辭

鳥居君

謹んで松田武雄君の御霊前にお別れの言葉を申し上げます。  
松田君、今日貴兄の御霊前で弔辭を讀ませて頂くことになろうとは、思ひもよらなかつたことで、一言づつ、言葉もない想ひです。しかし、二回に亘つて苦樂を共にした南極越冬の仲間として、悲しみをこらえ、一言御別れの言葉を述べさせて頂き、ありがとうございます。

貴方は、岩稜会の一員として活躍されてきた昭和三十四年、その卓抜した登山技術と豊富な経験を生かして頂くべく、第四次南極地域観測隊員として、南極観測に参加するようにとの私からの頼みをうけて、初めて南極に赴かれました。

二の時、たまたま調理関係に適切  
な人が得られず、止むを得ず研修を  
受けたいえ、南極越冬生活のうち  
では最も重要な調理、仕事と羊は  
受持つていたたむくことになりまし  
た。もともとセンスのあつた豊方は、た  
ちまちま皆の味覚を満足させる美  
味しい料理を、昭和基地の狭い  
不自由な調理場で、つぎつぎに作り  
出してくれました。

一方、登山技術の方では、基地から  
二キロあまり南の、ハムナ氷瀑の  
氷の垂直を壁に一人で懸垂降下し、  
その動きをとらえるストレーンゲージ  
の設置に活躍してくれました。

四次越冬隊出発の直前に結婚さ  
した君は、往きの船の中では、より  
明るいあけっぴろげな性格がう

時に奥方様より電報のやりとりを披露され、私たちを楽しませてくださいましたものでした。

四次越冬から帰ったあと五年ほどして、昭和十一年私は再び奥方に八次越冬隊員として南極へ同行してくださいよう求めました。このときは、私たちの後につづく九次隊の南極調査旅行に備えて、途中までのルートを開拓するという重要な仕事がありました。

この旅行の前、越冬の八月、飛りつめた海氷の上を三百キロに亘って雪上車で走り、ソ連隊のマラジョージナヤ基地を移れました。ここでも一晩得志の料理の腕を振り、その天性の人なつこさと相俟って、ソ連隊員の絶讃を博しました。二度、越冬していたアメリカ隊の交換科長者マクナマラ博士とも立ちまじり意気

投合し、後の彼の来日に際しても、旧交を温めたりした。この旅行の帰途、海氷が割れて君と同乗した雪上車が海中に没したとき、仲間の大瀧ドクターとともに、超人的努力で、倉糧の積んであった機を沈みかける雪上車から切り離し、皆を飢餓から救つてくれた。

南極卓ルード開拓では、海抜三千六百メートルのプラトー基地まで、往復二千六百キロに亘つて隊員の倉庫、面倒をみつつ、雪上車の運転や保守、観測、手伝いなども行なつて、この前人未踏の大陸旅行の成功の原動力の一つとなつてくれた。

この他、数々の想い出が、貴方のほがらがなだけとともにも、尽きぬことなく残っています。回次及び人次の越冬隊員の皆が、是りような

想いを抱きつつ、貴方の早すぎた  
御逝去を悲しんでおります。

ここにこれらの貴方の仲間を代  
表し、心から御冥福をお祈り  
申し上げます。松田武雄君心安  
らかに眠りたまえ。

昭和三十三年八月十四日

才四次、才八次南極地  
域探検隊

代表 鳥居 録也